



PRODUCTION
MAKING
IS
STORY
TELLING

特集 | モノヅクリはモノガタリ

かたちではなく 技能を残したい 仙台筆筒 門間屋



上 | 中型筆筒「二尺幅足開き」

サイズ | 開口56.0×高さ73.5×奥行35.0cm
価格 | 945,000円(税別)

下 | Console(コンソール) 木地呂塗

サイズ | 開口99.0×高さ74.5×奥行42.0cm
価格 | 860,000円(税別)

Inherit the Maestro not the Form



140年以上の歴史を持つ仙台筆筒の門間屋では、指物、漆、金具の「三技一体」と呼ばれる仙台筆筒の技術を継承し、今も仙台筆筒を作っている。指物とは木工で筆筒の構造をつくる技術。材料には変形の少ない10年以上寝かせた古木から吟味して選び出す。漆は岩手県産の浄法寺漆を原料に、30工程以上の塗り・砥ぎ・磨きを繰り返して、鏡のような艶を帯びる。唐獅子や牡丹など様々な模様を施した金具は、職人が金槌とタガネで一つひとつ打ち出していく。

七代目の門間一泰氏は「プロダクトを継承するのではなく、技能を残したい」と語る。技能が継承されるからこそ、100年前の筆筒を今でも修復でき、100年先の未来でも仙台筆筒を作ることができるのだ。

また、伝統的な仙台筆筒の修復や製作だけではなく、継承された技によって、現代人の生活に合った新しい仙台筆筒も作り始めている。2012年にはプロダクトデザイナーである安積朋子氏とアーティストの高橋理子氏とともに、洋家具のデザインと伝統技能を掛け合わせた新しい仙台筆筒「コンソール」を発表。祖母の嫁入り道具だった仙台筆筒を受け継ぎ継いでいく孫娘。被災で壊れた仙台筆筒が新品のように修復され涙する老人。東北を超え、海を超え、今までと異なる環境と文脈で使われる仙台筆筒の新作。仙台筆筒から今も様々なストーリーが生まれている。



Photo | Shiori Kawamoto (河本史織)

